



JICAの支援で造られた移住者子弟の学生寮が、PETIにより、子どもたちが放課後に集まるシェルターとして活用されている。日系人の若者がスタッフとして活動しているせいか、訪問したときに子どもたちが「こんにちは。ありがとうございます」と日本語で話し掛けてくれた

## 実践! ★★★★★ 人間の安全保障

### 自然とバランスの取れた より良い暮らしを

地球温暖化やバイオ燃料への関心が高まり、ブラジルの環境分野の取り組みが注目されている。JICAは環境に加え、貧困削減や治安維持などの分野で、人間の安全保障の視点に立った協力を、ブラジル日系人とも連携しながら進めている。

#### 地

地球温暖化への関心が集まる今日、世界最大の熱帯雨林アマゾンにあり、話題のバイオ燃料も30年近く前から実用化するなど、環境面での取り組みが注目されるブラジル。BRICS 1を構成する新興経済大国ですが、その一方で国内の経済格差は大きく、不均衡な社会経済構造にあります。

JICAは、アマゾン地域に暮らす確かな収入もない人々に「木を切るな」と言うのではなく、「どうすれば森とともに安定して暮らせるか」を彼らと共に考え、アマゾン熱帯雨林を中心とした環境管理や天然資源の持続的利用に有効なモデルを確立しようと、長年協力してきました。その取り組みの一つが「アマバ州氾濫原における森林資源持続的利用計画」です。違法に切られた熱帯雨林は、闇市場で買いたたかれます。JICAは人間の安全保障の視点から、アマゾン河岸住民の能力強化と組織化を図り、合法的で自然とバランスの取れた伐採によって人々の収入をより安定させ、生活を向上させることを目指しています。プロジェクトでは、ブラジル農業の発展と多様化を支えてきた日系人がアグロフォレストリーの専門家として活躍しています。環境分野以外では、最も貧しい東北地域を拠点に住民と自治体の能力強化を通じて生活向上を図る、東北ブラジル健康なまちづくりプロジェクト<sup>2</sup>を実施中です。世界保健機関(WHO)の提唱するヘルスプロモーションアプローチ<sup>2</sup>に本格的に取り組むプロジェクトとして注目されています。

また、日本の交番制度を導入・確立する「地域警察活動プロジェクト」を南米最大の都市サ

ンパウロで展開しています。住民と警察が信頼関係を強化し、地域の安全を連携して守っていくこの取り組みは、中南米各国からも関心が寄せられています。

世界で250万人といわれる日系人のうち、ブラジル日系人は140万人を超えます。そのうち30万人以上が、現在、日本で就労・就学しており、日本とブラジルは地球の反対側ながら「遠くて近い」関係にあります。日本人のブラジル移住は1990年代半ばで終わりましたが、JICAはその前身の時代から、移住者の生活を支援してきました。その一つとして、ブラジル国内10カ所の学生寮建設による移住者子弟の教育機会の確保がありますが、近年交通機関の発達もあり、多くの学生寮がその役割を終えようとしています。南マツトグロソ州の学生寮は現在、「児童労働撲滅プログラム(PETI)」<sup>3</sup>の活動拠点として活用されています。

2008年は日本からブラジルへの移住が始まり100年となる節目の年です。日系人は人口の1%にも満たない数ですが、農業、工学、医学などさまざまな分野で活躍し、ブラジル社会で高く評価されています。JICAはこうした日系人技術者の協力を得て中南米やアフリカへの南南協力を進めており、ブラジル日系人は今日もはや支援の対象ではなく、国際協力のパートナーとして国境を越えて活躍しています。

1 近年経済成長が著しいブラジル、ロシア、インド、中国の英語頭文字を合わせた4カ国の総称。  
2 人々が健康をよりコントロールし、改善できるようにするアプローチ。  
3 児童労働防止・撲滅のために、児童労働撲滅国際計画(IPEC)、国連児童基金(UNICEF)、ブラジル労働省の共同イニシアチブとしてつくられた、子どもの教育と家族の所得補助プログラム。